
P a n i c A t t a c k !

下弦 真宵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P a n i c A t t a c k !

【Nコード】

N 6 5 6 8 Y

【作者名】

下弦 真宵

【あらすじ】

体が異常に頑丈な以外、これといって特徴のない高校生、本条雪匡。彼の日常はまさに天国と地獄だった。でもどちらかというと天国に近い地獄だった。だがある日突然、その日常が修羅場と化す。突撃してくる美少女二人。彼の運命や如何に！？ TS性転換モノであり、恋愛要素を過分に含みます。苦手な方は気を付けて下さい。尚、ヒロインが主人公を好き過ぎて病んでいく可能性があるのをご注意！

叶わぬ願いと知りつつも

ついにこの日が来た。

叶わぬ想いを諦めきれず、十年もの歳月が流れてしまった。

日々苦しくて切なくて。

目の前に愛する人がいるのに、いつもそばにいてくれるのに。

一番近くにいるはずなのに、一番遠い存在。

優しい笑顔も、優しく肩に手を置いてくれることも、全ては友達として。

最高に楽しい日々であり、最高に絶望を味わう日々。

その楽しくも残酷で無慈悲な日々が、本屋で見つけた一冊の本との出会いでついに終わりを迎えようとしている。

「じゃーん！ 幼稚園児でも気軽に悪魔を召喚できる優しい魔術入門！ いやあ、この本を見つけた時は泣いて喜んじゃったねえ。まさに運命の出会いだよねえ」

背中に生える蝙蝠のような黒い羽。お尻から伸びる先端が矢印の黒い尻尾。悪魔と呼ぶにはちょっと可愛いんじゃないかな？ と思える水着姿の女の子が表紙に描かれた薄っぺらい本。

そして帯に書かれた紹介文。

『これで今日からあなたは天才魔術師！ 遊ぶ時はお父さんかお母さんと一緒に遊びましょう！ そして楽しく遊んだら本棚にきちんとしましましょう！ 小悪魔ちゃんからのお願いです』

注、対象年齢三歳以上。

ふふふ、ただの魔術師じゃない。天才魔術師になれるんだ。
対象年齢がだいぶ低いけど、以上なんだから問題ない。

この本さえあれば、僕の望みが叶えられるはずだ。

この本は暗記するほど何度も読み返した。だから本の内容は僕の頭の中に完璧に入っている。

しかもこの本は凄く理解しやすかった。

なにせ表紙の女の子の小悪魔ちゃんが進行役となり、とても分かりやすく説明しながら魔術の基礎から応用までを知っていく構成になっていたから。

まずは場所。

『人に迷惑のかからない広い場所で遊びましょう』

これは近くに公園があったからそこに決めた。この公園には芝生広場とグラウンドがある。地面に魔法陣を描かないといけないからグラウンドを選択。そして今現在はそのグラウンドにいる。
ノルマクリア。

次は服装。

『黒い服を着ましょう。黒いワンピースでも大丈夫だよ』

ローブはない。というより、ローブってなんなのかよくわからな
い。代用品としてワンピースとあるけど、黒いワンピースどころか
ワンピース自体を持っていない。

でも大丈夫。お母さんの冠婚葬祭用の黒いワンピースを拝借した。
バレたら怒られそうだけどノルマクリア。

次は道具。

『杖。もし杖がなかったらお父さんに作ってもらってね。（お父さんにお願ひ。硬いと危険なのでスポンジを巻くか布を巻くなど加工をしてお子様にお渡しください）』

さすがに杖はなかったから、公園に落ちていた木の枝で代用。それと僕はお子様じゃないからスポンジも布も巻かなかった。

ノルマクリア。

次は材料。

『材料はお花（その辺に生えているお花で大丈夫だよ）を用意してね』

花は公園の芝生広場に咲いていたシロツメクサを使用。

ノルマクリア。

最後は魔法陣。

『杖を使って地面に丸を描いて、その中に三角を二つ（六芒星）描きましよう』

かなりシンプルな魔法陣だ。一分で描けてしまった。

きつとこういったシンプルな物こそが本物なんだろう。

ノルマクリア。

気になったのは魔術を行う時間だ。本には召喚魔術を行う時間の規定は特に無かった。

いつでもいいってことなのかな？

とりあえず人目につく時間は避けたかったし、それに雰囲気を出したかったから深夜の二時をチョイスした。

草木も眠る丑三つ時って言うし、なんだか上手くいきそう。

あとは魔法陣の中心に花を置き、本の最後のページにある呪文の詠唱が録音された付録のボタンを押すだけだ。

小悪魔ちゃんの説明によると、小悪魔ちゃんが呪文を一節詠唱したら、復唱すればいいとのこと。

さらに召喚の儀式に必要な舞を舞わなければいけないようだけど、これは気持ちがかもっていれば特に決まりはないようだ。

芝生広場で摘んできたシロツメクサを魔法陣の中心に置き、数歩離れて本の最後のページを開く。

全ての準備は整った。

よし、始めよう！

ドキドキと高鳴る胸。緊張の一瞬。震える指先。

唾を飲み込み、ボタンを押した。

『よい子のみんなー！　こーんにーちわー！　小悪魔ちゃんでーす
』！

本から聞こえてきた元気な少女の声。これが小悪魔ちゃんの声か。想像とちよつと違う。

つてそうじゃない！　復唱しないと！

「よ、よい子のみんなー！　こーんにーちわー！　小悪魔ちゃんでーすー！」

舞は自由だからとりあえず右手を上げて声を張り上げる。

『元気なお返事をありがとー！ みんなは小悪魔ちゃんを召喚できるかなー？ じゃあ元気に踊っちゃえー！ レッツゴー！ イエーイ！』

「げ、元気なお返事をありがとー！ みんなは小悪魔ちゃんを召喚できるかなー？ じゃあ元気に踊っちゃえー！ れつつごー！ いえーい！」

必死に復唱しつつ、いえーい！ で思いつき飛び跳ねる。

そして、本から聞こえてきたズンチャカズンチャカというアップテンポの明るい伴奏。

その伴奏が続いて小悪魔ちゃんの詠唱が始まり、僕もそれにならって踊りながら復唱を続けた。

『ねこさんにゃんにゃんにゃおんにゃおん！』

「ねこさんにゃんにゃんにゃおんにゃおん！」

『いぬさんしっぽをふーりふり！』

「いぬさんしっぽをふーりふり！」

次々と上げられる動物の名前。恐らく生贄をなぞらえているんだろう。

額に浮き出た汗。夢中で踊りながら復唱する。

ただ一つの願いを叶えるために。

『さー！ よい子のみんなー！ いくよー！ ワンツーさんしー！
イエーイ！』
「さー！ よい子のみんなー！ いくよー！ わんつーさんしー！
いえーい！」

アップテンポの伴奏のリズムが最高潮に達する。
いよいよクライマックスか。

ただひたすら踊り、そして復唱した。

『みんな凄く元気でおりこうさんだったよー！ 小悪魔ちゃんも凄く楽しかった！ でも残念ながら、小悪魔ちゃんはたくさんのお友達に会いにいかねければなりません。でもみんなの元気な姿は忘れません。それにきつとまた会えるよ！ それまでパパとママの言うことをきちんと聞いて、おりこうさんにしててね！ じゃあね！
まったねー！ バイバーイ！』
「みんな凄く元気でおりこうさんだったよー！ 小悪魔ちゃんも凄く楽しかった！ でも残念ながら、小悪魔ちゃんはたくさんのお友達に会いにいかねければなりません。でもみんなの元気な姿は忘れません。それにきつとまた会えるよ！ それまでパパとママの言うことをきちんと聞いて、おりこうさんにしててね！ じゃあね！
まったねー！ バイバーイ！」

両手を上げて夜空を見上げた。

プツツ、と録音された音が切れる

頬を伝う雫。

肺が酸素を求めて僕に呼吸をしると急かす。

運動はあまり得意じゃないけど、それでも出来る限りのことはや
った。

あとは結果がついてくることを願うしかない。

「そう言えば、召喚魔術が成功したとして、どれくらいでわかるん
だろ？」

両手を上げて空を見上げたまま、ふと気になったことを呟く。

本には魔術が成功した場合の説明はなかった。

まあいつか。待っていればわかることだし、気長に待とう。

どれくらい待ったろう。三十分は経っただろうか。

魔法陣にこれといった変化は見られない。

「ちょっと冷えてきたなあ。汗かいたからなあ。着替えを持ってく
ればよかったなあ」

時間は午前二時四五分。ちょっと寒くなってきた。

首に汗拭き用のタオルを巻き、震え出した自分の体を抱き締める。

腕時計は午前四時を記している。

その場に座り、膝を抱えてひたすら魔法陣を見つめた。

「ワンピースつて下がスース する」

膝に顔を埋めて縮こまり、寒さに耐える。

まだ失敗と決まったわけじゃない。本には召喚にかかる時間が記載されてはいなかった。

まだ待ってみる価値は十分にある。

僕は眩い朝日を眺めていた。寒かった体も、朝日の暖かさで震えが止まった。

結局召喚は失敗した。きっと僕のせいだ。儀式の手順を間違えたか、それとも思いが足りなかったのか。

でも僕は諦めない。僕の想いは本物だ。

絶対に諦めない。

それから数日に一度、公園に出向いては召喚の儀式を行った。

絶対に諦めない。諦めるわけにはいかない。

『ねごさんにゃんにゃんにゃおんにゃおん!』

「ねごさんにゃんにゃんにゃおんにゃおん!」

『いぬさんしっぽをふーりふり!』

「いぬさんしっぽをふーりふり!」

本当は知っている。こんなものがまやかしたってことは。でもたとえまやかしたとしても、僕は信じて召喚魔術を続ける。

信じなければ、続けなければ、このままだと僕は狂ってしまう。

彼が、雪くんが僕に笑いかけてくれる度に、僕の胸は締め付けられて悲鳴を上げる。

雪くんが僕の肩に手を置いてくれる度に、心臓が張り裂けそうなほどに鼓動して、僕の全てを捧げてしまいたい衝動に駆られる。

僕はおかしいんだろうか？

『さー！ よい子のみんなー！ いくよー！ ワンツーさんしー

！ イエーイ！』

「さー！ よい子のみんなー！ いくよー！ わんつーさんしー

！ いえーい！」

僕は男だ。そして雪くんも男。

だからと言って、男性が好きなのじゃない。雪くんだから好きなんだ。

もし雪くんが女の子なら、やっぱり雪くんが好きだ。

だけど、僕と雪くんは男だ。同性だ。愛し合うことはできないし、その想いを打ち明けることもできない。

言えばきつと、雪くんは僕から離れて行ってしまっただろう。

それは嫌だ。絶対に嫌だ。雪くんが離れて行ってしまっくらいなら、今のままの方がいい。

だけど、やっぱりつらい。

いずれ雪くんを誰かに奪われると考ただけで、目の前が真っ暗になってしまう。

『みんな凄く元気でおりこうさんだったよー！ 小悪魔ちゃんも凄く楽しかった！ でも残念ながら、小悪魔ちゃんはたくさんのお友達に会いにいかねければなりません。でもみんなの元気な姿は忘れません。それにきつとまた会えるよ！ それまでパパとママの言うことをきちんと聞いて、おりこうさんにしててね！ じゃあね！ まったねー！ バイバーイ！』

「みんな凄く元気でおりこうさんだったよー！ 小悪魔ちゃんも凄く楽しかった！ でも残念ながら、小悪魔ちゃんはたくさんのお友達に会いにいかねければなりません。でもみんなの元気な姿は忘れません。それにきつとまた会えるよ！ それまでパパとママの言うことをきちんと聞いて、おりこうさんにしててね！ じゃあね！ まったねー！ バイバーイ！」

両手を上げて夜空を見上げる。

もう何度この儀式を繰り返したろう。

僕の望み。それは女の子になること。女の子になって、雪くんの一番そばに居ること。

まやかしなのは知っている。でも、今の僕にはすぎるものが必要なんだ。

「なア、声をかけるかどうかどうしようか物凄く迷ってたんだけどさ、あんたは危ないヤツか？」

突然後ろから聞こえた女性の声。

振り返ると、そこにはコンビニの袋を持った若い女性が立っ

た。

僕が怪しい行動を取っている自覚はある。でも、目の前の女性も僕と同等以上に怪しかった。

とても綺麗な人なんだけど、長い黒髪はボサボサ。着ているのは緑色のジャージ。しかも胸にはネームがついていて、二年五組田中、という名前が記されている。

そのジャージには見覚えがある。僕の中学のジャージだ。しかも丈が足りてない上に、女性はどう見ても十代後半か二十歳くらい。そして素足にサンダル。

ダルそうに僕を見るその女性は、ガリガリと頭を掻いて眠そうに欠伸をしている。

物凄く怪しい。

「ぼ、僕は怪しい人間です。こんな時間に公園で踊っている人間は怪しいです。近寄らない方がいいですよ」

できれば関わり合いになりたくなかったから、自分が怪しい人間だとアピールした。

「そっか、安心した。ホントに怪しいヤツは自分を怪しいって言わねーし。あたしはベルゼだ。よろしく」

そう言って右手を差し出す田中ベルゼさん。

マズい。なんだか気に入られてしまった。関わりたくないんだけど。

でもなんとなく悪い人じゃないような気がするし、軽く話して適

度に切り上げよう。

「僕は椎名綾瀬です。はじめまして」

差し出された右手を取って握手した。

「それにしてもさ、あんた気をつけた方がいーよ？ こんな夜更けに女の子が一人で公園で踊ってるなんてさ。しかもあんたみたいに可愛い子ならなおさらだよ。襲ってくれって言ってるようなもんだろ？」

「あ、いえ、僕は男なので大丈夫です」

「は？」

田中さんが目を見開いて僕を見つめる。

「いやいやいや、いやいやいやいや！ それは無理があるだろ？」

どっからどう見ても女の子だし、っーかそこら辺の女より全然かわいーし。もしかしてあたしをからかっているのか？」

「からかってません。僕は男です」

「まだゆーか」

呆れたようにジト目で僕を見る田中さんは、ボサボサの頭を掻いてため息をはく。

「まあいーや。んで、こんな夜更けにこんな所で踊ってなにしてんだよ。実は結構前から知ってたんだけどさ、怪しくて声をかけらなかつたんだよね。なんかおっかねーし」

「それは……」

なんて答えたらいいのかわからない。

魔術なんて非科学的なものが存在しないことくらい、僕にだってわかる。

「言いづらいことか？ まあいや、無理して言うこともねえよ」「握手していた右手を離し、頭を掻いた田中さんは、ダルそうにため息をはいてそう言った。

「ん？ なんだこの本？ それとこれは……魔法陣のつもりなのか？」

「あつ、それはっ」

地面に描かれた魔法陣と、その横に置いておいた魔術の入門書。それを見つけた田中さんは、本を拾ってマジマジと見つめる。

「魔術か。そつか、あんたは叶えたい望みでもあるのか。だからここで踊ってたわけか」

本のページを捲りながら、ブツブツと呟いている。

「対象年齢三歳以上って……ガキのお遊びかよ。残念だけど、この術式じゃ召喚魔術は」「知ってます！」

声を張り上げた僕を驚いた表情で見つめた田中さんは、にやりと不気味な笑みを見せた。

背筋に悪寒が走る。

「知っててやってたのか。おもしれーヤツだな。叶わぬ望みと知りながら、か。純粹なんだな。なるほどね、どーりでこんなチンケな

術式であたしに干渉できたわけだ」

「え？」

「いや、こつちの話。つーかあんたが儀式を行うたんびに煩くてさ。こつちはネットゲに集中したいっつーのに。まったく、サタンのボケの目を盗んでせっかく地上界に遊びに来たってのによ」

「は？」

頭をガリガリと搔いて不機嫌そうに呟く田中さんは、でもちよつとだけ嬉しそうに見えた。

「あんたさ、もし世界を手にする力をやるつつつたら、今の望みとどつちを選ぶ？」

「今の望みです」

「おいおい、悩みすらしねーのかよ？ ちよつとは悩もーぜ？ 世界だぞ？ 世界を手に入れたら望みなんてなんだって叶うだろ？」

「世界なんていりません。僕の望みは一つです」

不機嫌そうだった田中さんが、次第に真顔になっていく。

「金は？」

「いりません」

「名声は？」

「いりません」

「権力は？」

「いりません」

僕に質問をする度に、田中さんの表情は険しくなっていくた。

田中さんは真剣だ。本当に真剣に僕に質問している。

だから僕も真面目に答えなければならぬと思った。

「望みはなんだ？」
「女の子になることです」
「それでどうする？」
「雪くんに告白します」
「振られたら？」
「それでも告白します」
「それでも振られたら？」
「それでも、それでも告白します」

振られたら、その言葉に涙が出そうになった。

「ウザいって言われたら？ キモいって言われたら？ 消えろっていわれたら？ あんたはどうする？」
「う、ウザいって……キモいって……僕は、僕は……」

言われたくない言葉だった。考えないようにしていた言葉だった。でもそれが現実。田中さんの言葉は僕の心に突き刺さった。

「あんたは女として生きていけないのか？ ソイツのために女になって、ソイツから消えろって言われたら、それでもあんたは生きていけないのか？」

瞳から涙が溢れ出す。

現実だ。それが現実だ。たとえ僕が女の子になつたとしても、雪くんが僕を好きになつてくれる保証はどこにもない。それどころか、僕を蔑んだ目で見るかもしれない。気持ち悪がつて罵声を浴びせるかもしれない。

消えろって言われたら、僕はどこへ行ったらいいんだ。

でも、それでも……僕は雪くんが好きだ。

膝が震え、前のめりに倒れる。

その僕を田中さんが咄嗟に抱き止めてくれた。

「あんたを苦しめるつもりはねえんだけどさ、でも大切なことなんだ。最後まで答えて欲しい」

真面目で優しい田中さんの声。

返事はできなかつたけど、頷くことで自分の気持ちを伝えた。

「雪くんつつつたか。ソイツの心を意のままに操れるとしたら？

あんたはどうする？」

「……そんなの、そんなのは……雪くんじゃない」

「そうか、あんたはあくまでも自分を見て欲しいんだな。今のままのあんたを見て、そのあんたを好きになって欲しいんだな。そうか、そうか………つらい質問をしてごめん」

田中さんは僕を抱き締めたまま頭を撫でてくれる。

「はあーあ、力を使っちゃうと地上界に遊びに来てるのがバレちゃうんだよなあ。悠々自適なネットゲ三昧の日々も終わっちゃうのかあ。でもまあ、しゃーないよなあ。この子のこと気に入っちゃったしなあ」

ガックリと肩を落とした田中さんは、一際大きなため息をついて僕を離すと、複雑そうな表情で僕の頭を軽く叩いた。

「天使は望みを叶えちゃくれねえ。所詮アイツらは戒律に縛られるからな。そんであたしら墮天使は、その戒律を破って人間を愛し

「た天使なんだよ」

優しい瞳で僕を見つめ、相変わらずポンポンと僕の頭を叩く田中さん。

「あたしらは人間に幸せになつて欲しい。だから純粹な願いを持つたヤツのささやかな望みをたまに叶える。だけど、その望みがソイツを幸せにするとは限らねエ。そうやって結局不幸になったヤツラがあたし達を悪魔つて呼んだんだよ」

「え？ あく……ま？」

僕から離れた田中さんは、そのまま数歩後ずさりして立ち止まると、大きく息を吸い込み、ビシツと僕を指さした。

「椎名綾瀬エツ！ 最後の質問だコルアツ！ なりたい胸のサイズを言えコノ野郎オツ！ 特別サービスで好きなサイズにしてやんぜエツ！」

「へ？」

む、胸？ はい？ いきなりそんなことを言われても。

えーと、えーと、確か雪くんはDカップが好きとかなんとか言っていたような気が。

「ドイツ、Dカップで！」

「また随分と曖昧なことを言いやがってコノ野郎アツ！ Dにも色々とおんだらうがバカ野郎オツ！ まあいいつ！ 困るくらい的美乳にしてやんぜエツ！」

「は、はあ……」

再度ビシツと僕を指さした田中さんは、夜空を見上げて両手を広

げる。

「我が名は獄界の王ベルゼブブ！ ネットゲ三昧の日々を失うのはちとせつねエけど！ 我が名を持って椎名綾瀬の望みを叶える！ 文句があるヤツア上等だア！ このあたしが直々にタイマン張ってやんぜコルア！」

突然の地鳴り。田中さんが立っている地面が赤く光り輝き、円形の幾何学的な文様が浮かび上がった。

魔法陣。

僕が描いたものとは明らかに違う。複雑で精巧な輝く魔法陣の赤い光が田中さんを包む。

眩暈がする。冷や汗が止まらない。心臓が破裂しそうなほどに高鳴る。

そして背筋を寒気が駆け上がっていく。

本物だ。本物の魔法だ。田中さんは魔術師だったのか！？

「チツ、もう気づきやがったか！ サタンの野郎、張ってやがったな？ クソツタレがア！ 段取り無しでの力の行使だけだよ！ このあたしを舐めるんじゃないねエ！」

田中さんを包む赤い光が大きくなる。その田中さんより少し離れた場所に新たな魔法陣が浮かび上がり、その中から人影らしきものが浮かび上がった。

「ベルゼさまあ！ どうしてこのサタンめを置いていかれるのですかあ！ サタンめは寂し過ぎて死んでしまいそうでしたあ！」

魔法陣から出てきたのは、繊細な刺繍が施された鮮やかで豪華な黒いドレスを着た女性だった。

頭に飾った黒いバラ。地面にまでつく長い黒髪。大きくて綺麗な赤い瞳。透けるように白い肌。

今まで見たことも無いような綺麗な女性だった。

「なら死ねよっ！ キモいんだよテメエはよオっ！」

その女性に向かって容赦なく暴言をはく田中さんは、ぺっぺっと唾まではいた。

「まあ、まあっ！ あの小娘はなんですかっ！ 私と言う女がありながら！ ベルゼ様の恋の奴隷は私一人で十分ですっ！ それなのに……そのあなたっ！ あなたねえ、ちよっと可愛いからって図に乗らないでよっ！」

なぜか僕にあからさまに敵意を剥き出しにした女性は、ズカズカと僕の方へ歩いて来る。

なに？ え？ なんなの一体？ なんで僕を殺すみたいな目で見てるの？

「ぶっ飛ばこの変態がア！ しゃーんなろオー！」

その場で正拳突きを繰り出す田中さん。その拳は大気を震わせ、空間を歪ませるほどの衝撃波を伴って女性を襲う。

「ふんっ、術の二重行使でベルゼ様らしからぬ力の脆弱さです。このような攻撃は軽く消滅できますけど、せつかくなので受けます

！ きゃあー！」

かわす意志も防御する素振りも見せず、そのまま衝撃波を喰らった女性は、数十メートルほど吹き飛び、公園の周りを囲んでいる大きな木に衝突した。

は？ え？ ええー？ し、死ん、死んだんじゃない？

僕の心配をよそに、むくつと普通に起き上った女性は、ガクガクと震えながら自分を抱き締めている。

瀕死だ。普通に起き上ったけどやっぱり瀕死なんだ。当たり前だ。数十メートルも吹き飛ばされて、その拳句に木に激突したんだ。

救急車を呼ばないと死んでしまう。

「ああ、ああ！ ベルゼ様の愛の鞭！ 体が熱い！ 燃えるように熱い！ この痺れるような快感が堪らないわ！ 私つたらなんてふしだらな……まだご命令がなにのに達してしまふなんて……私はなんてふしだらな女なの！」

暗い上に遠目でよくはわからないけど、救急車を呼ぶよりこの場から逃げた方がいいような気がするのはどうしてだろう。

「キモいよー、アイツキモいよー。やだよー、やっぱり帰りたくねえよー」

田中さんも僕と同じ感覚なのか。引きつった顔でガタガタと震えている。

「ベルゼさまあつ！ このふしだらなサタンめをお仕置きしてくださいませえっ！」

赤い瞳が燃え上がり、信じられない速度でこっちに向かって突進

してくる。

「ひいひいひいっ！」

「ひいひいひいっ！」

それを見た僕と田中さんが、同時に悲鳴を上げた。

「いやだー！ こつちくんなー！ 鳥は飛ぶことこれあたわず！
獣駆けることこれあたわず！ 縛ることこれ禁なり！ 鉄鎖縛錠！」

田中さんの叫びと同時に、地面を突き破って巨大な鎖が何本も飛び出し、こつちに突進してくる女性を縛り上げる。

一本三十センチくらいの太さの鎖。あんなので全身を縛られたら確実に死ぬ。

「あ……くう。もっと……もっとおっ！」

全身を巨大な鎖で雁字搦めにされて、でも痛がるどころかニタニタと笑い、息を荒げながら顔を上気させて、まるで何かを求めるように叫び声を上げる女性。

「ひいひいひいっ！」

「ひいひいひいっ！」

それを見た僕と田中さんが、同時に悲鳴を上げた。

「た、田中さん……なんなんですかあの人。気味が悪いですよ」
「だろ？ だろ？ アイツキモいだろ？」

涙目で田中さんを見る僕と、涙目で僕を見る田中さん。

「あー、キモい。あー、寒気がする。って今はそれどころじゃねえな！ 椎名綾瀬エ！ 約束しろオ！」
「え？」

田中さんを包み込んだ赤い光が、高熱を帯びた炎のように燃え上がり、その中で田中さんはニツカリと笑う。

「あたしがお前を女にしてやる！ この世界の理を書き換えてな！ でもそこからはお前の努力次第だ！ いいか！ 必ず幸せになれよ！」
「は、はい！」

僕が頷くと同時に、燃え上がった赤い光は巨大な奔流となって夜空を突き破った。

静かな公園。

見上げると夜空には星が瞬いている。

鎖が突き出した地面は何事も無かったように元通りになり、その鎖に縛られた女性も消えている。

そして、僕に「幸せになれ」と言ってくれた田中さんの姿もどこにもなかった。

「夢……だったのかな？」

呟いた僕の頬を冷たい夜風が撫でた。

変則的な両想い

眩しさに薄目を開ける。

「朝か……」

カーテンの隙間から溢れた朝日が俺の顔を照らしていた。
枕元の時計を見ると、朝の六時半。

まだかなり眠いが、このまま二度寝するわけにはいかない。

「七時半には綾瀬が迎えに来るからな。準備しねエと」

ベッドから起き上がり、大きく伸びをして欠伸をする。

今日もまた、最高に楽しくて最高に残酷な一日が始まりを迎えた。

25

階段を下り、洗面所へと向かう。

顔と頭を洗って寝癖を直し、歯を磨いて着替えを済ませる。

「なんで俺は早起きしてまで毎朝髪を洗うのかね。なんかなあ、綾瀬にだらしない所を見られたくねエんだよなあ」

いつも元気で可愛い綾瀬。

幼稚園からずっと一緒。俺の親友であり、そして初恋の相手でもある。

俺は変なんだろうか。ああ、間違いなく変だ。

綾瀬は男だ。それは間違いがない。なにせ昔は共に立ちションをした仲だしな。男なのは間違いなく確実に確認している。だけど。

「なんでアイツはああも可愛いんだ。どうしても男に見えねエ」

綾瀬が可愛いのは近所でも評判だし、学校でも校内一可愛い男の子として有名だ。

はつきり言うと、綾瀬の可愛さは断トツだ、次元が違う。ウチの学校どころか、この界隈で綾瀬より可愛い女を俺は見たことがねエ。

しょうがないんじゃないのか？ あれだけ可愛くて性格もいいんだから、好きになっても仕方がないんじゃないのか？

現に綾瀬は女よりも男に告白される比率が高い。まあ、とは言っても綾瀬が男だとバレルまでは、だけど。

高校に入学した時は凄かった。学校内が綾瀬の話題で持ちきりだった。

俺を含めて綾瀬を知っている者達は、またかって感じて傍観してただけど。

そして、そんな綾瀬は傷つきやすく弱い所がある。

アイツはちゃんと男子学生用の制服を着てるし、自分を男だとはつきり言う。

でも、大概のヤツは信じない。特に初対面のヤツは。

そういうヤツらは勝手に綾瀬を好きになり、男だと知るや否や手の平を返したように綾瀬を攻める。

紛らわしいんだよ！ 女の振りしてんじゃねエよ！ 変態かよ！

男に告白してしまったことを、綾瀬のせいにすることによって取り繕うんだろう。

身勝手だ。綾瀬は何も悪くない。ただ普通より可愛いだけだ。

でも綾瀬は何も言い返さない。一人で悲しんでいるだけだ。

そんな綾瀬を俺はずっと守ってきた。と言っても俺は大したことをしていない。

ただ綾瀬のそばにいただけ。周りからはホモだの変態だのと罵られたけど、そんなの痛くも痒くもねエ。

あれは小学生の時だったか。体が弱く小さかった綾瀬は、友達と遊ぶとついて行けなかった。

俺もガキだったし遊びたかったけど、一人で寂しそうにしている綾瀬をどうしても放っておけなかった。

そのせいで俺は友達から距離を置かれるようになってしまった。

だから俺はいつも綾瀬のそばにいた。綾瀬も俺にべったりだった。

まあ、俺が綾瀬のそばにいたのは、単に綾瀬が可愛かったからという理由もある。なにせ初恋の相手だし。

そんな綾瀬は泣きながら俺に謝った。「僕のせいでごめんね。雪くんが遊べなくなつてごめんね」と何度も謝った。

あの泣き顔はいまだに忘れられない。可哀想とか思ったわけじゃない。

可愛かった。あの泣き顔は本当に可愛かった。

「綾瀬が女だったらなあ……」

洗面台に両手をついて、ガックリと頂垂れる。

綾瀬が女だったら。これはもうほぼ毎日考えている。

だが、だがしかし！ もし綾瀬が女だったら！

「絶対に俺なんか相手にされねエよな……」

美形なわけでもなし、頭がいいわけでもなし、運動が得意なわけでもない、凡百を絵に描いたようなこの俺なんか……。

「見向きもされねエよ。もしかしたら石ころを見るような目で見下されていたかもしれねエ」

そうなんだよなあ。綾瀬は男だから俺のそばにいてくれるんだよ。もし女だったら、俺なんか絶対に相手にされねエ。

複雑な気分だぜ。ため息しか出ねエ。

「まあいいか。朝飯食おう……」

朝から鬱になり、大きなため息をはいて洗面所を出た。

朝飯を食い終わり、再度歯を磨く。

「あんたも毎日頑張るわね。まあ、綾瀬ちゃんに嫌われたら、あなたには生きる希望がなくなるしね」

「うるへエよ。ほっとけよ」

俺の後ろに立って呆れた顔の母。

お袋エ、どうか俺をほつといてくれ。

『おはようございまーす』

玄関から聞こえた綾瀬の声。いつもながら可愛い声だ。

綾瀬は声変わりはしねエのかな？ できればして欲しくねエな。

「ほら急ぎなさい！ 綾瀬ちゃんを待たせるんじゃないわよバカ息子！」

「わーってるよ！ いいからほつといてくれよお母様！」

ペシンと俺の頭を叩くお袋。

うがいをしてそのお袋を睨むと急いで玄関へと向かった。

だが妙だな。お袋は綾瀬のことを「綾瀬くん」って呼んでいたはずだが。

綾瀬が女の子に見られることを気にしていると思えば、お袋はこれまで一度も「綾瀬ちゃん」なんて呼んだことはなかったはずだ。

ちなみにガキの頃は「あーくん」って呼んでいた。

なんだ？ なんだかやけに引つかかる。

「おはよ、雪くん」

「ああ、おはよう、あや……せ？」

玄関に立つ綾瀬。いつものように交わした挨拶。

だが俺の目は綾瀬に釘付けになっていた。

天使だ。俺の目の前に天使が立っている。

「どうしたの？ ぼーっとして」

「……なあ綾瀬エ、それはなんのつもりだコラ」

首を傾げる綾瀬。いや可愛いよお前は。

だが、だがな、さすがにこれは笑えねエ冗談だ。

「なんで女用の制服を着てんだよ。今日は学校で仮装大会でもあるのか？」

「あ、これ？ どうかかな？ 似合うかな？」

顔を赤らめて恥ずかしそうに笑う綾瀬は、その場でクルリと一回転した。

短めのスカートがふわりと舞い、綾瀬のほのかに甘い香りが風に乗って俺の鼻をくすぐる。

白いシャツに青いリボンネクタイ。その上から羽織ったベージューのブレザー。そして紺と緑と赤の短めなタータンチェックのスカート。

似合うか……だと？ 似合うかだとオ！ 似合ってるに決まってるんじゃないかよオ！

落ち着け俺、まず落ち着くんだ俺。

学校で仮装大会なんて催しは存在しねエ。それに綾瀬が女装する理由も何一つ思い浮かばねエ。

「おい綾瀬エ、簡潔に説明しろ。お前は何がしたいんだ？」

「あ、雪くん、ほっぺたに齒磨き粉がついてるよ？」

靴を脱いで玄関から廊下へ上がった綾瀬は、俺に近づくと俺の首に両手を回して踵を上げて背伸びし、そして俺の頬を舌でぺロツと舐めた。

おいイイイイ！ 朝から何サービスしてくれちゃってんのお前エ
エエエ！

「止めるバカっ！」
「あつっ！」

綾瀬を突き飛ばしてその場に尻餅をつき、床にしこたまケツを打ち付けた。

ケツが、ケツがイテエ。

「いたたた、お尻ぶっちゃたよ……」

声がかかる方へ視線を向けると、俺と同じように床に尻餅をついた綾瀬が、痛そうに顔を歪めている。

「あ、綾瀬、わるい……はいイイイイ!？」

俺の正面に尻餅をついている状態の綾瀬は、俺のアンクルからはスカートの中身が丸見えだった。

パンツが見えちゃってるんですけどオオオオ!

なんだ、なんなんだ一体？ これは一体どう言うことだ？ なぜ綾瀬が女装している？ なぜ綾瀬のパンツが見えている？ なぜピシクなんだ？

「凄くいい……。ってそうじゃねエだろオ！」

「雪くんは大丈夫？ ケガしてない？ ごめんね、ちょっと調子に乗り過ぎちゃった」

「四つん這いになった綾瀬が俺の方へとにじり寄って来る。」

「綾瀬が動く度に、たゆんと揺れる胸。」

「あ？ 胸？ ムネエエエエエエエ！？」

「ねえ雪くん、僕は変じゃないかな？ 気持ち悪くないかな？ 本当は凄く怖くて心臓が破れちゃいそうなんだよ。ねえ雪くん……」

「頬を赤く染めた綾瀬は、恥ずかしいような不安なような複雑な表情で、四つん這いのまま一歩ずつ俺に近寄って来る。」

「変？ 気持ち悪い？ それはない。それどころか、今日の綾瀬はいつもにも増して可愛いような気がする。」

「いや、確実に可愛くなっている。」

「前髪を押さえたヘアピン。いつもより大きく潤んだ瞳。赤く色づいた頬。プルンとした薄桃色の唇。サラサラで柔らかそうな髪。透き通るように白い肌。」

「それだけじゃない。綾瀬はかなり痩せていたはずだ。だからといって、現在は太っているわけじゃない。」

「なんと言うか、全体的に丸みを帯びているというか、どう見ても男の体型じゃない。童顔な綾瀬に不釣り合いな、たわわに実った胸も原因の一つなのか？」

「あ、綾瀬……。お前は……。男、だよ、な？」

俺の問い掛けと同時に、スパーンツ！ という軽やかな音が辺りに響き渡る。

頭に走る鈍痛。

「イテエエエエ！？　なんだ！？　隕石でも降って来たのか！？」

「このバカ息子オ！　綾瀬ちゃんになんて失礼なことを言うのよ！

綾瀬ちゃんは女の子に決まってるでしょうが！」

見上げると、仁王立ちした鬼がいた。

「ごめんね綾瀬ちゃん。ウチのバカ息子はまだ寝ぼけてるみたいで」

四つん這いのままの綾瀬に笑顔で語りかけた鬼は、その場にしゃがんで俺の耳を摘まみ上げる。

「イデデデデ！　もげるもげる！　マジでもげるって！」

「あんたねエ、綾瀬ちゃんみたいに可愛い子が、あんたみたいな唐変木を好きになってくれる確率なんて、本来なら目の前でビツクバンが起きる確率より低いのよ。わかる？　要するにゼロよ。いいえ、マイナスよ」

さすがは俺の母親。よくわかっていらっしやる。確かに綾瀬が女なら俺を好きになる確率なんてゼロだろう。

だが、だがしかし！　残念ながら綾瀬は男なんだよバカ野郎オ！

「何言ってるんだよお袋エ！　綾瀬は男だろうが！」

「なん……だと？」

お袋の体から黒いオーラが噴出し始める。

ヤベエ、なんでかしらんがマジギレしてやがる……。

「起きろバカ息子オ！ 目覚めるバカ息子オ！ さっさと覚醒しろオ！」

「ぐへエ！？ うぼろア！？ ぷるぽオ！？」

強烈なショートアッパーで体を宙に浮かせられ、そこから膝が腹にめり込み、跳び上がったお袋は変則高速回転胴回し蹴りを俺の頭部に炸裂させた。

し、死ぬ、マジで死んでしまう……。

床に叩きつけられて痙攣する俺と、スタツと華麗に着地する一人の修羅。

「反省して成仏しなさい、この薄ら唐変朴念仁」

「あぶうエ……」

ドガツと修羅の足が俺の頭部を踏みつける。

ビクビクと痙攣する体。ミシミシと悲鳴を上げる俺の頭部。

俺は開けてはいけないパンドラの箱を開けてしまった。修羅を本気で怒らせてしまった。このままだと頭を潰される。そして確実に殺される。

「雪くん！ しっかりして雪くん！」

死神が鎌を構えてニヤリと笑った時、女神が舞い降りた。

俺を包み込む柔らかで暖かな感触。ほのかに甘い香り。

「おばさん！ 僕は雪くんからなら何を言われてもいいの！ 何をされてもいいの！ 僕は雪くんが大好きなの！ 本当に本当に大好

きなの！」

俺を抱き締めた女神は修羅を睨む。

「ぐふっ……」

女神の眼差しを受け止めきれなかったのか、吐血した修羅はよろよろと後退りして、壁に手をつくと頂垂れた。

「なぜ……なぜ綾瀬ちゃんのような完璧な美少女が、ウチの木偶の坊を好きになるのよ。不可解だわ。理解できないわ。いいのかしら？ このままでいいのかしら？ 私はバカ息子の母親として綾瀬ちゃんの人生を守る義務があるんじゃないかしら……」

お袋エ……息子に対して容赦のない酷い言いようだが、おおむね大正解だぜ。

「おばさんは知ってるくせに。僕がどうして雪くんのが大好きなのか……」

微笑む女神。まさに女神の癒し。その笑みを見た修羅は、気怠そうに頭を掻きながら大きなため息をはき、カラカラと笑った。

「まあね、ウチの息子はバカだけど、あたしは母親として胸を張って自慢の息子だって言えるわ。バカだけど、ホントどうしようもなくバカだけど」

「雪くんはバカじゃないよ、おばさん」

「そう思ってるのは綾瀬ちゃんだけよ。そして、ずっとそう思っていて欲しいっておばさんは思ってる。いつか綾瀬ちゃんがおばさんの娘になってくれたならって、そう思ってる」

修羅らしからぬ爽やかな笑顔。

「それはちよつと高望みし過ぎかしら？」

「お、およめ……僕は……雪くんのおよめさんに……僕は……」

燃えるように顔を真っ赤にさせた女神は、強く俺を抱き締めてブツブツと呟いている。

どうでもいいが、俺の顔に当たっている柔らかな物体は、もしかしてシリコンか？

「ほら雪^{ゆきま}！ あんたはいつまでセクハラしてんのよ！ あれくらいで死ぬほど軟な育て方をした覚えはないわ！ さっさと起きなさい！」

「イデエ！？ イチイチ蹴るんじゃねエよ！？ バカがもつとバカになっちまうじゃねエかよ！」

ゴンツとスリッパを履いたつま先で俺の頭を蹴るお袋。

まあ、確かに俺の体は異様に頑丈だ。自分でもたまにスゲエって思うくらい頑丈だ。

ふっ、修羅の子はやはり修羅なのか……。

シリアルな笑顔（と自分で思いつつ）を浮かべながら起きると、横からいきなり俺に抱きついた綾瀬が、俺の頬にキスをした。

潤いを帯びた柔らかな感触。

あまりの不意打ちに驚くことすら忘れていた。

「あい？」

「あとで全部説明するから。だから……その時、僕の体を見て、雪

くん……」

呆然とする俺の耳元に唇をつけた綾瀬が、そう囁いた。

綾瀬エ！ 耳を舌でチロチロ舐めるんじゃないわねエ！ あん、とか言っ
つちやいそうじゃねえかバカ野郎ウ！

全くわけがわからねエ。俺はまだ寝てるのか？

そうか、なるほど、これは夢か。納得した。

納得したア！

恥ずかしそうに笑う綾瀬がその場に立ち上がり、俺の手を握って
引き寄せる。

されるがままの俺は、綾瀬のキスを受けた頬を擦りながら、全て
は夢なんだと確信して立ち上がった。

夢だ。これは夢なんだ。夢だから何をしたらって許されるんだ。

なあ綾瀬エ、おっぱい揉んでもいいか？

覚めない夢

いつもの通学路をいつものように二人で歩く。
いつもと違うのは綾瀬が女装をしていることだ。

それにしても、見れば見るほど女の子だ。もう完璧に超可愛い女の子だ。

見てるだけで鼻血が出そうになる。

しかも綾瀬の胸は俺の見立てによると、恐らくEに近いDくらいの大きさはあるな。

かなり好みだ。

見てるだけで鼻血が出そうになる。

しかも綾瀬は髪が長い。昔は短かったが中三の頃から突然伸ばし始め、今は肩辺りまで伸びている。いつも後ろで結ってるから正確な長さはわからんが。

女の子に間違われるのが嫌なら、切った方がいいんじゃないか？
って言ったが、綾瀬はかたくなに切るうとはしなかった。

何か伸ばしたい理由でもあるんだろう。

そんな綾瀬が女子生徒用のブレザーを着たせいで、破壊力が倍率ドンだ。

俺って後ろで髪を結ってる女の子が好きなんだよなア。

見てるだけで鼻血が出そうになる。

綾瀬エ、今のお前は何かから何まで俺好みだぜ。

ヤベツ、見てるだけで鼻血だ出てきた。

さて、これは夢なんだし、そろそろおっぱいを揉ませてもらおうか。

綾瀬エツ！ 容赦しねエゾオアツ！ 覚悟しろクラアツ！

ふむ、ここはやはり後ろから揉みしだくべきだな。

俺の隣を歩く綾瀬の後ろにササツと回り込むと、その俺の動きを目線で追った綾瀬が俺の方へと振り返る。

「？」

俺を見て首を傾げる綾瀬。

むう、手強い。

ササササツと綾瀬の死角へと移動すると、なぜか満面の笑顔で俺を追いかける綾瀬。

ぬう、こしゃくな。

右へ行くと見せかけてサツとフェイントを繰り出し、左へと転げて起き上がりざまにバックステップをして電柱の陰へと隠れる。

「雪くんみつけ」

ひょこつと電柱の横から顔を出し、俺の手を握って楽しそうに笑う綾瀬。

あ、見つかったかあ。テヘツ。

遊んでんじゃねエんだぞバカ野郎オ！ こっちは真面目にお前のおっぱいを揉もうとしてんだぞコルアアア！

「じゃあ次は雪くんが鬼ね。十数えてね。よーいどん！」

勝手なことをほざいた綾瀬は、俺に手を振りながらトコトコと走って行く。

そうか、次は俺が鬼か。なら十数えないとな。

電柱に手をつけて目を瞑り、数を数え始める。

「いち、にー、さーん、しー、ごーじゃねエだろうがア！いつの間に鬼ごっこになってんだよコルアツ！」

目を見開いて綾瀬を探すと、まだ意外と近くをトコトコと走っていた。

相変わらず綾瀬は足が遅いな。

さて。

「ひっ捕まえておっぱいを揉みしだいてやんぞゴルアアアツ！」

全力で綾瀬へと向かって駆け出す。

俺の叫びが聞こえたのか、後ろをふり返った綾瀬はトコトコがタカタカに変わる。

まあ、大して変わってねエが、綾瀬なりに必死なんだろう。

やっぱ綾瀬は可愛いな。

「でも容赦はしねエぞコルアツ！」

ものの数秒で綾瀬に追いつき、手を掴む。

「捕まえたぞコルアツ！ 観念しやがれウォルアツ！」

掴んだ手を引き寄せようとして、だが綾瀬は自ら俺に跳び込んで来た。

俺に抱きつき、肩を上下させて息を荒げている綾瀬は、顔を見上げると残念そうに、でも嬉しそうに笑う。

「つ、捕まっちゃったあ。やっぱり雪くんには敵わないよ」

「お、おう、捕まえちゃった……」

あるえ？ 何この展開？ 綾瀬をひっ捕まえて後ろからグヘへって感じにおっぱいを揉みしだくはずが、なんでこんな爽やかな展開になってんだ？

はた目から見たら海岸で追いかけてこするバカップルみてエじゃね？

なんか俺スゲエ満足しちゃってるんですけど。

周りを見回すと、通学中の学生や通勤中の社会人が、綾瀬を見てデレっとして俺を見てチツと舌打ちしていく。

ウケケケツ！ 悔しいかバカ共がア！ どーだ綾瀬は可愛かろうがアツ！

でも綾瀬は男ですけどね。

さてさて、ずっとこうしているわけにもいかねエな。さすがに周りの視線が痛くなってきたぜ。

まあ夢だからそんなに気にする必要もねエんだろうけど、夢だって一般常識を忘れない俺は良識人。

「おい綾瀬、いつまでくっついてんだよ」

「今日は学校を休んじゃおっか？ ずっとこうしていたい」

おいおい、何を言いだすんだコイツは？ 学校は休んじやダメだろうが。俺が唯一貰えそうな賞状である皆勤賞が消えちゃうじゃねエかよ。

皆勤賞を貰うために、熱が四十度あっても這いながら学校に登校したんだぞ俺は。

「ほれ、離れる。このままだと歩けねエよ」

「ぶー、わかったよ。雪くんがそう言うなら離れる」

そう言いながらも綾瀬は中々離れようとしねエ。

なんなんだ一体？ 今日の綾瀬はなんか変だぞ？

今までも手を握ってきたりはしたけど、抱きついてきたことはねエ。

いや、嬉しいよ？ 嬉しいけども。

いくら可愛いって言っても綾瀬は男だ。通学中に、しかも道のと真ん中で男同士が抱き合うとか、絶対にヤベエだろ？

つーか、実はさつきからウチの学校の制服を着たヤツラが、俺達を見ながら結構通過して行っているんだけども。

ヤベエな、俺が綾瀬に抱きついたことにしねエとな。

俺は何を言われようと屁の河童だが、傷つきやすい綾瀬はホモとか言われたら耐えられねエだろ。

夢だけでも、これは夢だけでも、綾瀬が罵声を浴びせられるかも、とか思うと俺が気に食わねエ。

おっぱいを揉もうとして言うのもなんだけど。

「離れる綾瀬。そんで学校で何を聞かれても全部俺のせいにする。

俺はバカだの変態だのホモだのと言われ慣れてるから、今さら何を

言われても問題ねエ。つーか修羅の子である俺に言葉の攻撃など通用しねエ」

抱きつく綾瀬の肩を掴み、引き離そうとする。でも綾瀬は必死にしがみついて離れようとしねエ。

「おい綾瀬っ！ 離れ」

「嫌だっ！ 離れたくないっ！」

叫んだ……あの綾瀬が、あの内気な綾瀬が、滅多に声を荒げないあの綾瀬が……叫んだ？

周りの視線が一気に俺達に集中する。

ははは、まあ夢だからな。そうだそうだ、これは夢なんだ。

だが夢にしても冗談が過ぎるぜ。あの綾瀬が叫ぶはずがねエだろ？

「どうして……」

「あ？」

俺の胸に顔を埋める綾瀬は、小声で呟く。

「どうして雪くんはそんなに強いんだよ。バカって言われても耳をほじりながら、はーん、とか言ってるし。変態って言われても鼻をほじりながら、ふえーん、とか言ってるし」

ああ、いや、だってお袋が俺を出産した時、「うわっ、バカ産んじやった！」って言ったらしーぜ？

そんなこと聞いたらよ、普通にバカって言われても何も感じねエ。

「何言われたって平気な人間なんかいないよ。でも雪くんはどんな

につらくても絶対に表に出さないんだ。雪くんは本当の強さを知ってる人なんだ」

「いやいや、いやいやいや！マジで気にしてねエだけなんだけども！」

お袋も言ってたけどよ、俺をバカだと思ってねエのはマジで綾瀬だけだと思っぜ？

実際自分でもバカだなあって思うし、それに男は皆変態なんだよ！胸を張って変態だって言えねエようなヤツア男じゃねエんだよクルアツ！

「全部自分のせいにして、いつも僕を守ってくれて、いつも僕のそばにいてくれて。どうして雪くんはそんなにカッコいいの？」

あ？何を言っただ綾瀬は？

俺がいつもお前のそばにいるのはアレだろ、ウチの学校で俺にかまってくれんのがお前と武本しかいねエからだろうがア！

寂しいこと思い出させるんじゃないねエ！

それと聞き捨てならねエ言葉を聞いたような気がするんだが……。

カッコいい……とな？カッコいいとなアアアツ！ならおっぱい揉ませろ綾瀬エエエツ！

「一秒ずつ好きになっていく。一秒前の僕より、一秒後の僕ももっと雪くんを好きになってる。もう嫌だ。もう離したくない……」

その声と同時に俺は突き飛ばされた。

わけもわからず体勢を崩して地面に尻餅をつく。

ケツが、ケツがイテエ。本日二度目だぞ？
いくら俺でもケツが割れちまうじゃねエかよオオオ！

混乱していた俺は、俺の上に覆い被さってきたのが綾瀬だと気付くのに一瞬遅れてしまった。

「雪くん……大好き。僕はもう……我慢しないって決めたんだ」

唇に感じる柔らかな感触。

俺に覆い被さって来た綾瀬は、茫然としていた俺の唇にキスをした。

ほのかに甘く、そして柔らかな感触が俺の意識を遠ざけさせた。

気がつくと教室にいた。

綾瀬に押し倒されて、キスされたあとの記憶がねエ。

だが大丈夫だ。キスの感触とその記憶は必要以上にバツチリと残っている。

教室にいるということは、間違いなく登校したんだろう。

それにこれは夢だ。時間がすっ飛ばすことなどよくあることだ。

「ちよつと甘くて柔らかかったな……」

意識がはつきりしてから、ずっと同じ映像だけが俺の脳裏を支配

している。

俺を押し倒し、俺にキスをする綾瀬。

真っ赤な顔で、でも強い意志を秘めた大きな瞳で俺を見つめ、その瞳を閉じて俺にキスをした。

その映像が何度も何度も繰り返して流れている。

まるで壊れたデツキのように。

「よい、とてもよい夢だな……」

ポツリと呟いて辺りを見回しても、可愛い綾瀬の姿が見当たらない。

それもそうか、綾瀬は一年だ。学年が違う。

チツ、余計な所がリアルな夢だぜ。夢なんだから学年が一緒でもいいじゃねエかよ。

「ふっ、それにしても、いつも以上に疎外感を感じるのはなぜだ」

時刻はまだ八時少し手前だが、クラスの生徒がほぼ全員集結しつつある。

一体どうしたんだ？ いつもならまだ半分も登校していない時間のはずだ。

それがどうしたとか、はっきり言ってお祭り騒ぎだ。

ギャーギャーワーワーと騒ぎながら、俺を指さして「変態！」だの「鬼畜！」だの「強姦魔！」だのと騒ぎ立てている。

特に女子が。

男子はと言うと、俺を殺すような目つきで睨んでいる者が大半だ。まあ、いつものことだと言えばそれまでだが、なんとなくいつもより殺気を帯びているような気がする。

ふっ、事情は知らねエが、はたして貴様らごときに修羅の子を殺すことなどできるかな？

「おい本条！ お前ついにやっちまったな！ 学校中が大騒ぎだぜ！」

「あ？ なにがだ？ 武本」

椅子に座っている俺の肩に腕を回し、腰を屈めて小声だが興奮した様子で話かけてきた武本。

バカだ変態だと罵られてばかりの俺には、綾瀬がこの武本くらいしか話かけてこない。

「何がってお前な！ テメエが何やったのかテメエの胸に手を当てて聞いてみる！」

「いいだろう、俺は俺自身に問いかけるとする」

なあ俺、俺は何をしたんだ？

さあ？

了解だ、俺。

「わからなかったが？」

「お前な……」

呆れたようなジト目で俺を見る武本。

そんな武本はかなりのイケメンだ。しかも身長が高く身体能力も高い上に、頭もそこそこいい。

そして当然の如く女子にモテる。

俺に言わせれば、はっきり言ってぶっ殺してやりてエ部類の人間だ。

だが意外なことに、武本は女と付き合ったことがない。要するに俺と一緒に童貞だ。

だからと言つてホモってわけじゃない。まあ、そう言う噂は立っているし、だから俺と同盟を組んでいるわけだが。

こいつが女子と付き合わない理由。それは武本の女の好みが原因だ。

武本は一見して「遊んじゃってる俺イケてるぜ風」に見える。

原因は髪が赤く、しかもロン毛だからだ。

だがこれには理由がある。

武本は髪を染めているわけではなく、未熟児として生まれたのが原因らしい。

現在もかなり赤いが、それでもだいぶマシになった方だと言つ。

そしてロン毛だが、これは武本の親父がハゲだからだ。

もう一度言おう。それは武本の親父がハゲだからだ！

武本の親父曰く「無くなる前に伸ばし、そしてフサフサの喜びを噛み締めるオ！」だそうだ。

泣けるぜ。

とまあ、そういう経緯があり「遊んじゃってる俺イケてるぜ風」に見える武本だが、実際は友達思いで真面目なヤツだ。

そんな武本の女性の好みは、内気だが心を開くと笑顔が可愛い女の子、要するに綾瀬タイプがストライクど真ん中らしい。

そして綾瀬に告白した経験もある。

ちなみに武本曰く「俺は面食いじゃねエ。肝心なのは心だ！」と言いつているが、綾瀬に告白した経験がある以上、面食いでは無

いとは言い切れない。

まあ、それはいいとして、要するに武本に言い寄ってくる女子は、ちよつと遊んでる風のイケイケタイプが多く、それらの女子からの告白をことごとく断り、武本は武本で内気な読書少女タイプなどに告白して、だがことごとく断られている。

いくら武本が「遊んじゃってる俺イケてるぜ風」に見えてしまい、真面目な子から怖がられているとしても、かなりの美形であることは事実だ。

しかも真面目な女ほど、チヨイワル美形には弱いとエロ本に書いてあった。

それなのに、好きになった相手からことごとく振られるのは妙だ。

そして俺はある噂を耳にした。

どうもウチの学校には武本のファンクラブが存在するらしく、裏でなにやら黒い力が働いているらしい。

たとえば武本が告白した内気な読書少女に対し「武本と付き合ったらぶつ殺す。いや、ブチ殺す！」とか脅してみたり。

そんなわけで彼女もいない寂しい武本は、同じく寂しい俺と親友であり、その武本を事実上独占している俺は、当然の如く女子から敵視されている。

「お前……綾瀬ちゃんを公衆の面前で押し倒して……ち、ち、チツスしたそうじゃねエかよ！ やるなこの野郎オ！」

「あ？ 俺が？ 綾瀬を？」

「とぼけんじゃねエよバカ野郎コノ野郎オ！」

俺の肩に回した腕で、俺の首を絞める武本。
顔が真っ赤でやけに楽しそうだ。
純な野郎だな。

だがどう言うことだ？ 俺が綾瀬を押し倒した？

ああそうか、普通に考えたら綾瀬が俺を押し倒すなんて現実的じゃねエ。

現場を見てたヤツらは、あまりの非現実的な光景に記憶を書き換え、俺が綾瀬を押し倒したことにして脳内に補完したんだろう。

コイツは好都合だ。俺が押し倒したことになるれば、責められるのは俺だ。綾瀬に被害が及ぶことはないだろう。

まあ、夢なんだからどうだっていいけどな。

「ああ、俺が綾瀬を押し倒してキスした。綾瀬が可愛くて我慢できなかったんだ」

「マジか！ マジかよお前！ カッキー！ 本物の男だぜ！ 今日から師匠と呼ばせてくれ！」

はしゃぎまくる武本は、俺の首を締め上げながらガクガクと揺らし、真っ赤な顔で「チョーカッキー！」とか言いながら喜んでる。そうか？ いやなんだか照れるな。

なんだこの違和感は。

俺が綾瀬を押し倒してキスしたんだぞ？ 綾瀬は男だぞ？ なぜそんなに浮かれる？

「そう言えば本条！ 綾瀬ちゃんだがな！ 今日はかなりご機嫌で

鼻歌を歌いながら教室に入って行ったらしいぜ？」

「ほう、綾瀬はご機嫌だったか」

「綾瀬ちゃん、ずっとお前にアタックしてたからな！ それを teme は幼馴染は恋愛対象にはならねエとか言つてよ！ 何様だよって感じだったけどよ！ なんだよ結局 teme も綾瀬ちゃんのが好きだったんじゃないかよ！」

「あ？」

綾瀬が俺にアタックしてた？ バレーボールのアタックか？ 身に覚えがねエな。

幼馴染は恋愛対象にはならない？ 俺がそんなことを言つたっただけか？

全く言つた覚えがねエな。

「氣いつけるよ本条。お前が手を出したのが誰なのか、あの綾瀬ちゃんだぞ。今まではお前が綾瀬ちゃんを相手にしなかったお陰で我慢してたヤツラが、お前が綾瀬ちゃんに手を出したことで殺氣立ってやがる」

「あ？」

何言つてんだコイツは。

「殺氣立つって誰が？」

「バカかお前は！ 綾瀬ちゃんのファンに決まってるだろうが！」

綾瀬のファン？ まあ、あんなだけ可愛いんだからファンがいてもおかしくはねエけどよ、綾瀬は男だぞ？ 男の俺とキスして誰が怒るんだよ？

ウチの学校にはホモ連合でもあんのか？ 普通なら気持ち悪がる所だろ？

それとも女子のファンか？ 確かに綾瀬を好きな女子はいるって聞いたことはあるけどよ、騒ぎになるほどいたのか？ 初耳だな。

「うーか、朝から綾瀬は女装してるし、いきなりチューされるし、学校では騒ぎになってるし、ホントに妙な夢だな。」

「よく聞け本条。お前と綾瀬ちゃんの仲を引き裂こうとするヤツが絶対に出て来る。俺は綾瀬ちゃんの気持ちを知ってるし、お前は親友だ。だからお前らを守ってやりてエ。俺もできるだけ協力する。いいか本条、絶対に綾瀬ちゃんを守り抜けよ！」

「あ、ああ、どうも」

俺の肩に手を回したまま、俺の手を強く握った武本は、力強い目で俺を見つめる。

武本、お前はいいヤツだな。言ってることはサッパリわからんが。それにしても、なんだこの青春ラブコメ展開は？ 俺ってこういう願望があつたのか？

あつたんだろうな。現にそう言う夢を見てるわけだし。

突然教室の扉が勢いよく開かれる。そして小さな影が俺達に向かって飛び込んで来た。

「雪くん！」

飛び込んで来たのは綾瀬だった。しかもなぜか顔が真っ青で、かなり焦っている様子だ。教室中の視線が綾瀬に集中する。

「おう、どうした綾瀬」

「おお！ 朝綾瀬ちゃんゲット！」

そんな綾瀬を見て声をかける俺と武本。

「おはようございます武本先輩！ 雪くんちよつと来て！」

武本にペコリと頭を下げ、息を切らせながら俺の手を掴んでグイグイと引つ張る綾瀬。

かなり焦ってるな。

これまた急展開だ。

これは俺の夢だろ？ どうしたいんだ俺。次はどんなラブコメ展開が俺を待っていると言うんだ。

なんだかわくわくしてきたアアア！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6568y/>

P a n i c A t t a c k !

2011年11月21日00時09分発行